

「狂」をめぐる対話

四四

村島義彦

はじめに

書店でひもどく學術書の類いは、論文スタイルにせよ、随筆スタイルにせよ、報告スタイルにせよ、ひたすらモノローグの論述様式を採用し、これ以外を目にする機会は無に近いにちがいない。けれども、長い歴史をふり返るなら、論述様式そのものは、こうしたモノローグの長広舌に狭く限られていたわけではない。代表的なところでは、西洋の思想的源流の一翼を担うプラトンのあまたの対話篇が挙げられるかもしれない。ここでは、芝居のシナリオさながら、作中人物の交わす生きたセリフのやり取りを模したダイアローグの様式が、高度な哲学思想を展開する上で、堂々と用いられていたからである。

プラトンの作品は、なるほど「西洋の思想的源流の一翼を担う」ものではあっても、この評価はしかし、固有の哲学思想という中身にのみを絞って、いっそう固有の「対話という様式」にはなんら焦点を当てていなかった。ダイアローグという様式は、その後、わずかな例外を除けば、思想の世界でほとんど継承されることなく、もっぱらに主流を占めたのは、他でもない、われわれに馴染みのモノローグの論述様式であった。

こうした歴史的事実に目を向けると、まさにモノローグは、いわゆる学問的な論述様式として、ダイアローグ以上に優れていると評価したくなるけれども、これは、果たして正しいのだろうか。学問的な中身を語

る上で、そもそもモノローグが大きな効力を発揮する点は、あまたの実体験から、われわれにも十分に知られているのだが、しかるにダイアローグの方は、残念ながら、ほとんど実体験で試された噂を耳にしないのである。ならばプラトンは、中身の展開にそぐわない劣った様式を、ただ無自覚に用いて憚らない愚者であったのか、それとも、ある種の意図を込めてあえて用いた知者であったのか。当然ながら、「前者」と答える人など居ないにちがいない。

自らの作品を世に問うかぎりの人間なら、訴えんとする中身を、なるだけありありと相手方に伝えるべく、最も適した様式を本気で模索しないわけにはいかない。この中身にふさわしいのは、論文スタイルか、それとも随筆スタイルか、いやいや、こうしたモノローグの様式よりはダイアローグの様式かもしれないな・・と。プラトンもまた、そうした一人ではなかったか。およそこう仮定すると、あまねく類例を欠いて、ゆえに異端の姿を纏いがちなダイアローグ自体も、学問的な中身を展開する上で、あながち不適切とは言い切れないように思われる。そもそも中身に、双方のいずれが最も適するかの査定は、これを目にする読者の手に委ねられてしかるべきだからである。

こうした自覚に立って、わたしは、今回の論文作成にあたり、そもそも記述のあり方を、従来とは方向を異にして、モノローグよりはダイアローグに託することにした。これを介して、従来とは異質のどうした

効果が具体的に導き出されたか——この点については、先にも示したように、あげて読者の評価を待つことにしたい。できうれば、選ばれた方向がそう間違っていないかった、という幅広い肯定の声を期待しながら：

(一)

「今日は、いささかテーマを変えて、世にいう「狂」を取り上げるとしよう。なかなか魅力的でもあるからね」

「よいのですか。個人的に興味はあっても、教育人間学を専攻する者として、あえて取り上げるに足るテーマであるのかどうか、かすかな心配がないわけではありません」

「思ったより生真面目だね。だが、心配したもうな。ここにいう「狂」は、人間の本質を探る上で格好のテーマと考えられるべきで、これまで、教育人間学の手で十分に扱われなかったこと自体、むしろ、不可解といえは不可解でもある。おそらく、この対話の終わりがみえる頃には、こちらの満面の笑みを保証できるのではないかな」

「お言葉を信じるとしましょう」

「ならば始めるとして、まず「狂」の中身が特定されなくてはならないだろう。狂そのものは、あまりに多様なコンテキストで、あまりに多様な意味内容を付与されてきたからだ」

「分からなくはありません」

「たとえば、小型の国語辞典を紐解いてみても、そこでの「狂」の項目に、どれだけの中身的な広がりがあるか確認できることだろう。ざっと紹介してみても、まず第一に、狂人、狂気、狂態、発狂、奇狂、風狂など、要するに、常態とかけ離れていること、が、そして第二に、競馬狂、野球狂といった、いわゆる、一事に熱中して生活の均衡を失うこと、が、さ

らには第三に、狂歌、狂句、狂詩、狂言、醉狂など、まさしく、滑稽やおどけ、が、最後に第四として、狂暴、狂奔、狂喜、狂爛、狂騷、熱狂など、つまりは、驚くほどに激しいこと、が、そもそもの中身として登場してくるからだ」

「仰せの通りです」

「それぞれがコンテキストを異にして、まるで別の意味に用いられているけれども、並べて一瞥すると、しかし、ある共通項が浮かび上がってくるのではないだろうか。分かるかね」

「申し訳ありません」

「謝る必要はないさ。こう考えてみればどうかな。ここに挙げた四つの場合は、それぞれが、一方における「常態」「生活の均衡」「しらふ」「適度」など、要するに、世のまとも一般からの何らかのはみ出しに他ならない。狂はこのように、ノーマルな世界からの諸々の逸脱として、いうところの、まともでない世界を形造っているわけだ」

「なるほど」

「ところで、狂の本質をこうしたノーマルからの逸脱に求めるとして、そもそもその逸脱には、大きく三つの方向が考えられるのではないかね」

「と言いますと」

「他でもない、ノーマルからはみ出す際に、むしろ、どちらかにはみ出さざるを得ないから、その方向に着目して、まずは「上に向けたそれ」が、そして逆に「下に向けたそれ」が、さらには別に「横に向けたそれ」も考えられてしかるべきだろう。それゆえ狂には、「上への狂」と「下への狂」と「横への狂」が考えられることになる」

「理屈は分かるものの、具体的なイメージが今ひとつ伴わないのです。が・・・」

「語られている中身は、それほど難解という訳でもない。というのも、平凡で健全(?)な世の常識人からみれば、おのれの自己実現に向けて全存在を賭ける古今東西の名だたる冒険的なパイオニアたちは、それぞれ「上への狂」に相当するだろうし、それぞれのスタイルで世間に異を唱えるサブカルチャー・タイプの反抗グループなどは、まさしく「横への狂」に相当し、諸々の精神疾患に苛まれて異常行為に走るクライアントたちは、つまるところ「下への狂」に相当するだろうからだ。そうは思わないかね」

「なるほど」

「ざっとこのように、当の狂には三つのタイプがあるけれども、われわれが論じてしかるべき狂は、しかしながら、これらすべてという訳ではない。いやしくも教育人間学を専攻する身で、狂を論じる以上、そもその論究を介して、今ある人間理解に今以上の幅と深みが加えられないのであれば、そうした論究など、あえて試みられるに足りないだろう。ここではだから、「下への狂」は除いて、「上への狂」と「横への狂」のみが、扱われてよい正当な対象となるだろう」

「納得しました」

(二)

「それにしても、われわれはなぜ、こんなにも狂——むろん「上への狂」と「横への狂」——に惹かれるのだろうか。狂には、われわれを誘い込まずには措かない妖しい魔力がしっかりと纏いつているのは否めないはずだ」

「そうですね。わたしの感想ではしかし、「惹かれる」というよりは「気になる」と言い換えたい気もします。狂の世界に一方では惹かれつ

つ、他方では、強いためらいも隠せないからです。興味と逡巡、期待と不安、好奇と尻込み、こうした交錯を言い当てるには「気になる」に勝るセリフはないと考えるのですが・・・」

「ご立派、ご立派、言葉への細やかな気配りは、大いに結構と心から拍手したい。狂という未知は、世の一般人にとって、興味なり抵抗なり賛同なりの対象として、いつの時代にも、気になる。存在を止めたことはなかったからね。ならば次に、なぜこうも狂が気になるかの所以そのものを、具体的な狂を生きた歴史上の人物の言動に問いかけてみようか」

「お願いします」

「知つての通り、「何せうぞ くすんで 一期は夢よ ただ狂へ」は、世に名高い『閑吟集』の一節なのだが、ここには、どことなく危険で、しかしながら甘美な蜜を仄めかした、無視しがたい特有の妖しさがうつつすらと漂っているにちがいない。ところで、この妖しさに身を委ねつつ、あくまでも開き直って、この世を生きた人物として、さて、誰の名が挙げられるだろうか」

「すぐには思い浮かばないのですが・・・」

「たとえば、一休禪師などはどうかな。かれは、頓知の一休さんなどともてはやされ、広く子供たちの人気者になっているけれども、その実、世の禅僧一般とはまるで逆の、それこそ破天荒を地で行く生活も意に介さなかったから、世の人びとは、その凄まじさを評して「風狂の禅僧」と呼んだのであった。当人の破戒の凄まじさたるや、愛人と添い寝して「美女の淫水を吸う」と臆面もなく口走ったり、あるいは、「生まれては 死ぬるなりけり おしなべて 釈迦も達磨も 猫も杓子も」とか「世の中は 食うてはこして ねて起きて さてそのあとは 死ぬるばかりよ」などの、いかにも世を舐めた道歌の類いをしらふで口にするふてぶてしさの中に、ありありと垣間見られるにちがいない」

「まさに『風狂』の名に恥じない行状ですね」

「あるいは、一休禪師ほど露骨な風狂は示さなかったにしても、やはり立派な風狂に数え入れられてよい歴史的な有名人として、さらに、幕末の英傑の名も挙げておこう。かれは、幕府側の人間だったのだが……」

「もしかして勝海舟ではないでしょうか」

「もしかしないで勝海舟だ。かれの手記には、時の將軍に拜謁しつつ、その権威もどこ吹く風、心の中でしゃあしやあと、この御仁も閨の中ではやはり下々と同じく四つん這いになれるのだろうか、と想像してニヤリとするなど、それこそ謹厳実直な幕臣が耳にすれば卒倒もしかねない禁句の数々が満載されているからだ。江戸城の無血開城から維新後の悠々自適まで、当人の座右の銘も告げる「得意淡然、失意悠然」を地で行く生活ぶりは、格式に縛られた武士階級や市井の温厚な庶民階級の日々に、おそらくは、幕臣の雄にあるまじき風狂と映ったにちがいない」

「今の時代に置き換えても、そうした傍若無人は、とうてい真似の及ばないところですよ」

「さらには、日本から西洋に目を移しても、こうした風狂の実例には事欠かない。極端なところでは、「樽の中のディオゲネス」の異名をもったキュニコス派の哲人（シノベのディオゲネス）の逸話がわけても有名だろう。巷の賢者という評判を聞きつけて、あえて面会の足を運んだアレキサンダー大王が、何か希望はないかと親切に声を掛けたところ、樽に起居していた乞食同然のこの人物は、さも不機嫌そうに、ともかくそこを退いてくれ、陽が当たらないので、と素っ気なく呟いたと古い伝承は教えているからだ」

「何とも凄まじいシニカルぶりですね」

「ディオゲネスにはさらに、こうした逸話もあった。街中でおもむろに「おおい、人間どもよ！」と叫んだところ、大勢の人たちが集まってきた。

「狂」をめぐる対話

た。かれはしかし、杖を振り上げて「わたしが呼んだのは人間であって、ガラクタどもに用はない」と大声で怒鳴り散らした、というね。ここまですると単なるシニカルを通り越して、『半狂乱』に近いかもしれない」

「まさに同感です」

「もつとも風狂の変人という点でなら、ソクラテスも決して引けは取らないだろう。今日でこそソクラテスは、愛知（ピロソピア）に生きて愛知に死んだ、文字通りに『生きた哲学』として広く世に讃えられているけれども、当時のアテナイ社会ではしかし、どうであったのか。おそらくは、アリストパネスの『雲』に描かれた『奇矯の塊』に近い大変人のイメージで、一般には理解されていたにちがいない」

「そうですね。われわれの知るソクラテスは、つまりはプラトンの作品を介しているわけですから、これが世に出回る以前の状態となると、まるきり違ったソクラテス像があつておかしくはありません。そこではいまだ、当人の言行に対する、そもその哲学的意義にまで踏み込んだのつぶさな弁明など、およそ目にされなかつたでしょうから」

「われわれとしては、プラトンの恩恵に心から感謝せざるまい。とはいえ、対話篇にみるソクラテスには、ダイモンの合図と夢知らせ、奇妙な託宣の検証とアブの使命、知の愛求と無知の告白など、まっとうな常識人の尺度を超えた、まさしく理解に苦しむ点が多く含まれていたから、その裁判と死の宣告は、陪審員連中の感情的反発もさることながら、より基本的には、当人の理解を超えた風狂性にそもその端を発していた、と考えてみるん差し支えはないだろう」

「同感です」

「およそこのように、わが国の一休禪師にせよ勝海舟にせよ、あるいは、異国のディオゲネスにせよソクラテスにせよ、共に、まともな一般人の目には、どこか異質な『まともでない人間』と映ったのは否定で

きない。というのも、ここにいうまともな一般人の代表に、「なせばなる
なさねばならぬ 何事も ならぬは人の なさぬなりけり」と詠んで、
徹底した質素儉約と殖産興業に取り組んで見事に藩政改革を成し遂げた
米沢藩君主の上杉鷹山の顔をそつと思ひ浮かべるだけで、先の四名のま
ともでない在り方はおのずと検証されるだろうから」

「仰せの通りです」

(三)

「ところで、いささか反省を交えて振り返りたいのだが、われわれは、
あまりにも気軽に「まとも」とか「まともでない」などと口にしてはい
なかつたろうか」

「と言いますと」

「ここで用いられてきた「狂」まともでない世界」という等式は、さら
に歩を進めて、「まともでない世界」価値的にマイナス」とまで結び付け
て、果たして問題はないのだろうか、ということなのだ。というのも、
狂そのものを性格規定した「まともでない世界」という言い回しは、世
の慣例に従つたにすぎず、この場合の「まともでない」は要するに、「世
間とは趣を異にした」とほとんど同意味にちがいない。われわれはだか
ら、「まともな」と形容された当の世間が、果たしてどこまで「まとも」
なのかを改めて問い直さなくてはならないだろう」

「全くです」

「まず、ここにいう世間とは、いわゆる常識・慣習・大衆・一般・日常
等々の総称であつて、まさしくマジョリティの世界にほかならない」

「異論はありません」

「いわゆる世間は、広く世のマジョリティを代弁するから、辛らつな批

評家の手で、たとえば、商品価値に彩られ経済的合理性に染め上げられ
た効率至上の世界、などと酷評されてもいる。フロムの用語を借りるな
ら、HAVEの論理が幅を利かせる世界とでもなるだろうか」

「否定はできません」

「この場合、あくまでも対極に位置するのは、BEの論理を奉じる形の、
存在価値に彩られ人間的合理性に染め上げられたプロセス重視の世界と
なるにちがいない。この世界はしかし、なるほど価値的にまっとうとし
ても、数の面でマイノリティに留まるほかはない」

「仕方のない事実です」

「そうすると、メジャーである世間を中心に据えて、そこでのHAVE
の世相をそのまま「正ないし常」と置くなら、これとは逆のBEの世相
は、マイナーを理由にあえて「狂」と位置づけられざるを得ないだろう」

「理屈の上ではそうなります」

「ここにみた事情は、あまたの人間ドラマを刻んだ歴史の中に数限りな
く確認されるにちがいない。ソクラテスにせよイエスにせよ、当時の一
般人の目には、世の中の間尺を超えた異質の存在として、大きくは狂の
範疇に数え入れられたのであるから」

「仕方のない悲劇、と語るべきでしょうか」

「とはいえ、世間の物差しをノーマルと等置するかぎり、これとは別の
物差しは、必然的にアブ・ノーマルの烙印を押されるほかはない。聖人
にせよ賢者にせよ、おしなべて「世間とは異なる物差し」を具えていた
から、おのずと世の常人から区別されたのだが、世の常人から区別され
たのはしかし、これらの聖人や賢者のみではなかつた」

「と言いますと」

「真正正銘の狂人たちもやはり、その異質性の点で、世の常人から等し
く区別されたからだ。聖人の場合は「上」に向けて、狂人の場合は「下」

に向けて、ともあれ常人一般からかけ離れているわけだけでも、人の目で捉えるかぎり、ここでの上下の判定は容易でなく、ゆえに双方は混同されて、「聖人と狂人は紙一重」などと真顔で囁かれたりもする」

「痛ましい限りです」

「もつとも、聖人にしても狂人にしても、世の常人から眺めれば、ともに世捨人のイメージを深く纏うのは否めない。けれども、単純に「世捨人」と呼ばれても、あえて自らの意志で世に決別を告げた、文字通りに世を捨てた人」と、世に対して切々と未練を訴えるのに世の方が見向きもしない、文字通りに世から捨てられた人」では、まるで趣が異なるのである」

「うまい表現ですね」

「こうした意味では、そもそもの世捨人という呼称は、聖人の耳には心地よい賛嘆の響きとして、他方、狂人の耳には忌わしい罵りの響きとして、あくまでも別様に聞き取られたにちがいない。その場合、まさに世捨人である聖人は、脱世間に身を委ねた狂ではあつても、この狂はしかし、価値的なマイナスをいささかも意味しないのである」

「まさにそうです」

(四)

「およそこのように、狂人という「下への狂」は論外として、聖人という「上への狂」や反抗グループなどの「横への狂」が、あえて脱世間に身を委ねるといふ点で、必ずしもマイナス価値を意味せず、むしろ逆に、世間というマジョリテイが基本的に内包する妥協・陳腐・慣性・迎合・旧守など衆愚の諸側面に目を向けるなら、ここからの逸脱（つまりは狂）には、いわく言いがたい魅力が感じられるにちがいない。歴史的にみて

も狂は、もつぱらの不快や憎悪や蔑みの対象というよりは、時として、隠れた憧憬の対象でもあったのだから」

「よく分かります」

「ならば世の人は、そうした憧憬に促されて、自らの内なる想いをさまざまな場であえて実行に移したといえるだろうか。そもそもの憧憬を宿した人たちの数に比べて、世に登場する狂の数は、あまりに少ないと驚かずにはいられないからだ」

「なるほど」

「こうしたズレはしかし、何に由来するのだろうか」

「教えて下さい」

「虚心坦懐にわが心を省みるなら、おのずと答えも見つかるのではないかな。そこには、あまねく未知に対する興味と逡巡、期待と不安、好奇と尻込みの不思議な交錯が目に見えるだろうからだ。もしも一步を踏み出したら、そのまま帰ってこれられないのでは・・・という内心の不安は、まともな神経の持ち主なら当然に覚えられてしかるべきで、これ自体は、むしろ健全の証でもある」

「そうですよね。前人未到の領域に分け入る時、いくら装備を重ねても、やはり内心のおののきは抑え切れないのですから」

「ならば、物理的な領域でもそうだととして、さらに心理的な領域となると、おののき自体も倍加するのではないだろうか。というのも、物理的な未知では、地平を同じくした迷い込みが怖れの対象となるのに対して、心理的な未知では、地平を異にした迷い込みがそうなるからだ。すなわち、ここにいる「帰ってこれられない」は、前者では「この地点に戻れない」を意味し、後者では「元の自分に戻れない」を意味した、と考えるくてはならない」

「もつともです」

「ここでしきりと思い出されるのが、『ナチュラル・マインド』におけるA・ワイルのメッセージだ。かれは、マリファナやLSD等のドラッグに対する人びとの根強い興味・関心のゆえんを求めて、これ自体を、すべての人間に生得的な〴〵日常とは異なる意識状態を周期的に体験したいという欲求〴〵と規定したのだが、その上でさらに、ここに登場した「日常とは異なる意識状態」の描き出しを図って、ともあれ、日常の意識状態での思考法を「ストレート思考」、意識の変化した状態での思考法を「ストロンド思考」と命名した」

「それは初耳です」

「その上でこう語っているのだ。われわれの内には「ストレート」と「ストロンド」と命名されてよい二つの心の働かせ方が生得的に具わっていて、平生は、もっぱらに前者のみが声を大にして存在を訴え、後者の声は、それにかき消されて耳に達しない。けれども、むろん無いわけではなく、かすかに存在を訴え続けているから、われわれは、時としてその声を聞き取って、言い知れない郷愁に誘われる。ドラッグへの密かな関心も、つまりはこの郷愁に端を発しているのだ、とね」

「興味深いメッセージです」

「こうした中身を、では、先に述べた中身に重ね合わせてみよう。すると、〴〵心理的な領域での未知に対しては、怖れつつも覗かずにはおれない好奇の念と、惹かれつつも思い切って飛び込んでみる度胸の欠落がわれわれの内複雑に交じり合い、とどのつまりは未知へのしりごみを導き出している〴〵という心的状態は、ドラッグに対する密かな好奇と内心のためらい、ないしは、ストロンド思考への抑えがたい興味と拭いがたい不安、の交錯結果として導き出される〴〵日常世界への留まり〴〵と同一地平に属するのが理解されるにちがいない」

「なるほど」

「これはしかし、昔も今も、広く世のマジョリティではあるだろう」
「ええ」

(五)

「ここで少し、あるゲームに挑戦してみよう。その昔、といってもわたしの子供時代なのだが、NHKの人気ラジオ番組の一つに「とんち教室」というのがあった。思い出しても懐かしいが、司会のアナウンサーと多彩なゲストによる、「〇〇と掛けて」「△△と解く」「その心は」「□□である」の所式に則った、互いの機知の牙えを競い合う即答ゲームに、わたしも含めて、当時の大半の大人たちは夢中でラジオに翳りついたものだ。その際に覚えた興奮に促されて、われわれも、こう挑戦してはどうだろうか」

「と言いますと」

「要するに、ここでの〇〇に〴〵われわれの人格〴〵を、次の△△に〴〵ジグソー・パズル〴〵を挿入してみるわけだ。すなわち「われわれの人格と掛けて」「ジグソー・パズルと解く」という風に。すると「その心」はどのように読み解かれるべきだろうか」

「まるでお手上げです」

「かつての「とんち教室」の常連たちから蔑みの失笑を買わないためにも、意を決して、あえてこう訴えてみよう。〴〵むやみに解体すると、分解状態のまま元に戻せなくなるから〴〵とね」

「やはりお手上げです」

「それでもあるまい。昔も今も隠れた人気を誇っているジグソー・パズルは、そもそもの復元を頭に置かないで、むやみに解体すると、いざ元に戻そうとしても当の復元は困難となる。これはしかし、われわれの人

格にもそのまま当て嵌まるのではないだろうか」

「なぜ」

「考えてみて欲しい。われわれの本体ともいべき人格は、われわれ自身が現に用いている間尺に沿った価値上のまとまりを一応は築き上げている。そうした意味で、今ある自分はつまるところ、今ある間尺に全規定されてあると考えられてよいだろう」

「なるほど」

「こうして、間尺そのものの転換は自分そのものの転換に等しく、ゆえに、今ある間尺とは異質のそれに接すると、われわれは、本能的に身構えて、たいていは臆病にならざるを得ない。これはしかし、異質の間尺を忌避してというよりは、それに惹かれつつも躊躇するという、関心と尻込みが複雑に交錯した末に弾き出された帰結というべきだろう」

「ええ」

「少し前に紹介したストーンド思考へのためらいも、こうした一例に他ならなかった。というのも、非日常を代表するストーンド思考の安易な受け入れは、必然的に、日常を代表するストレート思考に介入して、後者を中心にまとめられた今ある自分に揺さぶりをかけ、つまりはその解体も招きかねないからだ」

「よく分かります」

「今ある自分を脱皮して別の自分に変身したいという密かな願望は、ワイルの指摘を俟つまでもなく、かなり広くわれわれの内に認められるかもしれない。われわれはだから、異質の間尺としてのストーンド思考にこうも関心を寄せるのだろうか。けれども、内なる願望に身を委ねてストーンド思考に手を出すと、果たして、無事に日常世界に戻ってこられるのだろうか」

「つらい質問です」

「試しに今ある自分を変えんとして、その結果、当の自分が根底から変質したのでは、とうてい試しにならないだろう。自分という凧を大空に舞わせるにしても、凧そのものが、大地と糸で繋がっているからこそ、どこまでも大胆に昇らせることができるのであって、もしも糸が切れていて、どこに飛んでいくかの見当もつかないのでは、とうてい大空に舞わせることも叶わない」

「まったくです」

「このように、自らの中に異質な間尺を取り入れる際には、それでもしかし、今ある間尺との何らかの繋がりが途切れる心配はない、と一応は確信されないかぎり、あえて無理は避けて賢い敬遠に訴えるべきなのである」

「賛成の一票を投じましょう」

(六)

「さて、狂へのためらいは、つまるところ、あえてそこに踏み込んだなら戻ることが叶わないのではないか、という心理的不安に大きく裏打ちされていた。けれどもこれは、狂の世界への素人が抱くごく一般的な不安にすぎない。ならば、狂の世界の玄人たちは、自らの体験を介して、こうした点をどう捉えているのだろうか」

「胸の内を覗いてみたい気もします」

「とはいえ、当人の胸の内を当人の口から直接に聞き出すのは、当然ながら望むべくもないのだが、そもそもその振る舞いから間接に心の中を窺い知るのなら、さほど出来ない相談でもない」

「本当ですか」

「ともあれ試しに、先に紹介した一休禪師と勝海舟のケースを眺めてみ

ると、双方に共通するのは、いわゆる「人を食った」振る舞いを透かして、世の常識一般への醒めた態度と固有の冷やかしと独特の余裕が、あくまでも混然一体化して垣間見られる点にちがいない。一休ならば禅僧としての役柄を、海舟ならば幕臣としての役柄を、それぞれ個性的にこなしながらも、共に、自らの役柄を「まさしく役柄として」演じ抜いている色彩が拭えないのである」

「なるほど」

「歴史という生の舞台で、一方は、一休という役柄を堂々と演じ、他方は、海舟という役柄を堂々と演じているといった印象は、双方の具体的な言動を眺めるなら、おそらく否定はできないはずだ。真面目であるべき人生において、まるで役者さながら、当の人生すら芝居の舞台と捉えて憚らない不真面目さに、世の一般人は、常軌をはみ出した狂の世界を感じ取ったにちがいない」

「その通りです」

「ざっとこのように、一休と海舟における狂には、生真面目な人生すら芝居小屋の舞台と捉える「演」の姿勢がわけても強く映し出されていたわけだが、ここにはしかし、先に掲げた「あえて狂に踏み込んだなら戻ることが叶わないのではないか」という問いに答える一つの手掛かりが、それとなく潜んでいるのではないだろうか」

「と言いますと」

「ここに指摘した演の姿勢では、演じられる役柄と演じる役者の心理的間隙が、今ある自分と本来の自分の間隙として意識され、しかも、演じられる役柄とは別に演じる役者がいるわけではなく、今の役柄を措いて役者本人はいずれにも存在しないのだが、だからといって、今の役柄が役者本人というわけではない舞台的事情が、当然ながら暗黙に前提されていたからだ。この場合、いかなる役柄が選ばれようと、選んだ役者

は、選ばれた役柄と即自的な形で同一化することはなく、役者本人が役柄にどれほど打ち込んで没入しても、双方の距離は依然として消え去らない。今ある役柄は、できるだけ見事に演じるように手渡された、そもそも課題にすぎないのだから」

「なるほど」

「こうした発想はしかし、見たところ「斬新」に映るだろうが、そうとも限らない。英語でお馴染みの「パーソン」や「パーソナリティ」にも、つぶさに吟味すると、ここでの発想が読み取れなくはないからだ」

「ご説明ください」

「周知のように、各人に相当する英語名は「パーソン (person)」であり、人格に相應する英語名は「パーソナリティ (personality)」であるのだが、双方はともに、仮面を意味するギリシア語の「ペルソナ (persona)」にその源を仰いでいた」

「そうでした」

「これに基づくなら、各人 (パーソン) も、その具体的な実体である人格 (パーソナリティ) も、つまりは諸々の属性に彩られた仮面 (ペルソナ) に等しく、この仮面はしかも、それを被る当の本人との必然的な距離を暗黙に前提していたにちがいない」

「なるほど」

「この場合の仮面は、先の「演」に当てはめると、演じられるべき役柄のシンボルと位置づけてよいから、今ある各人——あるいは具体的な実体である人格——も、同じく特定の役柄として解釈されていたのは否めない。およそこのように、演という姿勢は、英語世界に語源を辿っても、今あるわれわれ (パーソン) を捉える伝統的なイメージとして、そもそもその権威を強く保証されていたのである」

「面白いですね」

「では、これまでの知見を踏まえつつ、改めて、一休禪師と勝海舟に目を向けてみよう。かれらは共に、類をみない演の姿勢の達人であったのだが、そうした姿勢を貫いてみられたのは、他でもない、世間から期待された役柄というマスクを、被るだけのマスクにすぎないと一方では嘲りつつ、かといって、いつも脱ぎ捨てて憚らないのではなく、あくまでも自らの意思で具体的なTPO（人・時・処）に合わせて、その着脱をコントロールできる点であった。かれらは共に、自らのマスクに囚われず、こだわらず、縛られなかったから、必要に応じて、着けるも自由、脱ぐも自由、を堂々と実践できたにちがいない」

「なるほど」

「もつとも、(1)にいう実践そのものが、外的な物理 (physical) 次元よりは内的な精神 (mental) 次元に、いつそう強く焦点づけられていたのは改めて断るまでもない。そうはいっても、一休の場合はむしろ、当のマスクの着脱をややもすればフィジカルな次元であえて実行に移した結果、世にいう「風狂の禪者」への道を歩んだのに対して、勝海舟の場合にはむしろ、そもそものマスクの着脱自在性をフィジカルよりはメンタルな次元にあえて留めた結果、世にいう「幕末の英傑」への道を歩んだ、という違いは指摘できるかもしれないが・・・」

「仰せの通りです」

「ならば、以上から導き出された、マスク着脱の自在性」と、フィジカルとメンタルの両次元」という二項自体をあえて色彩に置き換えて、「世にいう正（ないし常）」と「世にいう狂」を色付けてみると、果たして、どのような図柄が浮かび上がってくるだろうか」

「いよいよ大詰めですね」

「その励ましに乗って、大胆（よりは無謀）を承知でスケッチに挑むとしよう。まず、一般の常識人に代表される「世にいう正」は、マスクの

ひたすらな着、それもメンタルとフィジカルとの両次元における着としてイメージされ、対して「世にいう狂」の一方、すなわち、バサラに走るグループ等に代表される、横に向けた狂は、マスクのひたすらな脱、それもフィジカルな次元における脱として、さらに他方の、聖人・賢者・英傑たちに代表される、上に向けた狂は、マスクの着と脱の併用、それもメンタルな次元での脱とフィジカルな次元での着として、それぞれにイメージされてよいだろう」

「なるほど」

「こうした場合に、横に向けた狂」と上に向けた狂の実質的な差は、つまるところ前者が、「メンタル面でのマスクの着+フィジカル面でのマスクの脱」を常態とするのに対して、後者が逆に、「メンタル面でのマスクの脱+フィジカル面でのマスクの着（のポーズ）」を常態とする点に求められるにちがいない」

「段々と整理されてきました」

「いずれの狂もしかし、マスクの着が常態化して脱自体を極度に怖れる一般人の目には、得体の知れない気味悪さとそれだけで覗き込まずには居れない魅力を同居させた、あくまでも始末に困るタブー（禁忌）と映ってしかるべきなのである」

「了解しました」

(七)

「とはいえ、狂をめぐる問題は、以上ですべてが尽くされた訳ではない。これまでの考察では、主として上に向けた狂に焦点づけて「狂の世界」が解析されてきたけれども、改めて振り返ってみると、ここにいう、上に向けた狂の大きな部分を占める或る領域について、ほとん

ど触れる機会がなかったからである」

「どの領域でしようか」

「いわゆる『宗教的な狂』なのだが、この、異世界に向けた踏み出しの代表例ともいえる狂は、なおも手付かず放置されている。これについてはしかし、今回は、事細かに論じる時間的余裕がもはやない」

「まことに残念です」

「ともあれ最後に、プラトンの試みた「狂気(マニア)」の分析例を、ささやかなサービスとして紹介しておこう。この哲学者は、わけでも『パイドロス』で集中的に、それも、マニア(狂気)の積極面に着目しながら、いわゆる宗教的な狂をかなり精力的に論じているのだが、その際の基本的なマニア認識は、おそらく、「……しかしながら実際には、われわれの身に起こる数々の善きものの中でも、その最も偉大なるものは、狂気を通じて生まれてくるのである。むしろその狂気とは、神から授かって与えられる狂気でなければならぬ」(二四四A)というセリフに集約されるにちがいない。そして、選ばれた人間に最大の善を約束するのである。神からの狂気(テイア・マニア)は、それを司る当の神に因んで、たとえば、予言の靈感は「アポロンが司る狂気」、秘儀の靈感は「ディオニュソスが司る狂気」、芸術の靈感は「ムーサの神々が司る狂気」、恋の靈感は「アフロディテとエロースが司る狂気」等々と命名され、各々の内実が豊富な具体例を介して見事に視覚化されている」

「詳しく学びたいですね」

「この他にも、酒にまつわる『パックスの狂気』や、さらには『哲学の狂気』まで登場してくるけれども、プラトンの目には、ひとかどの事柄

を成そうとすれば、分野を問わず、賢しらかな計算や分別の日常を越え出る必要があり、それには、自力に加えて、神からの狂気^レがあくまでも不可欠、という辛口の人間的現実がありありと捉えられていたのかもしれない」

「今日に向けた貴重な『福音』と解したい気分です」

おわりに

ほとんど馴染みのない様式に挑戦して、さまざまの戸惑いを味わいつつ、ともあれ、伝えてみたいメッセージの前身を、モノローグではなくダイアローグの形にまとめ上げてみた。ここでの前身に本当にふさわしいのは、そもそもどちらの様式なのか、という問いに答えるには、双方を並置して、できれば複数の識者の判定に委ねる以外にないけれども、これはしかし、許された紙数に妨げられて、ぜいたくな「無いものねだり」とあきらめる他はない。

ダイアローグという技法は、しばしば予期しない筆の運びを促して、うれしい戸惑いに襲われるのも再三ではなかった。かつてまとめた論文の類いを、あえてダイアローグに移し変えるなら、どうした趣とリズムと色合いを手に入れ、替わって、どうした色調と抑揚と味わいを失うか——これについては、近い将来、自分の目で心ゆくまで確かめてみたいと考えている。さぞかし面白い発見があるにちがいない。

(本学文学部教授)